

明治の新聞連載小説に描かれた挿絵（以下、新聞小説挿絵）は、情報のとぼしいその時代の生活文化、風俗を知るための、貴重な情報源のひとつである。くわしくは後述するが、風俗の一環である「身装——身体と装い」についても、新聞小説挿絵がなによりの価値をもつのは、「年代のたしかな、解説つき、ヴィジュアル情報である」という点だろう。

おなじ重要な情報源である写真は、写されている人物も、ものも、見る人の知識や思いこみ以外に、解釈の手

がかりをもっていないことが多い。また写された人やシーンのほとんどが「写真むき」のすがた、情景になっていることも、その時代のカメラの普及度を考えればやむをえないことだった。

本書では新聞小説、とくに連載小説の挿絵から近代の日本人のすがたや、日常の暮らしのさまを見ていくが、その前にまず、近代初期の新聞挿絵を成り立たせていた環境と、さまざまな条件、ならびに連載小説挿絵のもつ信憑性について理解しておきたい。

一、新聞小説挿絵の誕生

江戸時代の瓦版はべつとして、明治維新以前にもすでにいくつかの新聞が、日本人や外国人の手で発行されていた。したがって、それらを見れば最初の新聞挿絵とい

うものがいつ生まれたかは容易にわかりそうだが、それはそれほど簡単ではない。紙面に「絵」あるいは「図」を入れることは、日本でも外国でも新聞の歴史のごく初

めからあったが、新聞挿絵の起源説に相違が生じるのは、挿絵の条件や定義の違いのためだろう。

挿絵というより付図のはじめのうちものは、その日のニュース記事や雑報に添えられた簡単な一片の絵で、編集者の中で絵心のある人間が、ときには紙面を見やすくするための配慮から添えたものだったかもしれない。そういった絵はコマ絵（小間絵、駒絵）とよばれ、そのころは狂画といわれた戯画、つまりマンガ風のものもあった。それには名のある画人が、名を隠して腕を振るうこともあったようだ。

その日かぎりの事件記事がやがて続きものになり、虚実ないまぜの連載小説に発展する。それはだいたい一八八〇年代、ほぼ明治一〇年代半ば以後、とみていい

だろう。そのつぎの段階が連載小説に絵が添えられる、絵入小説である。

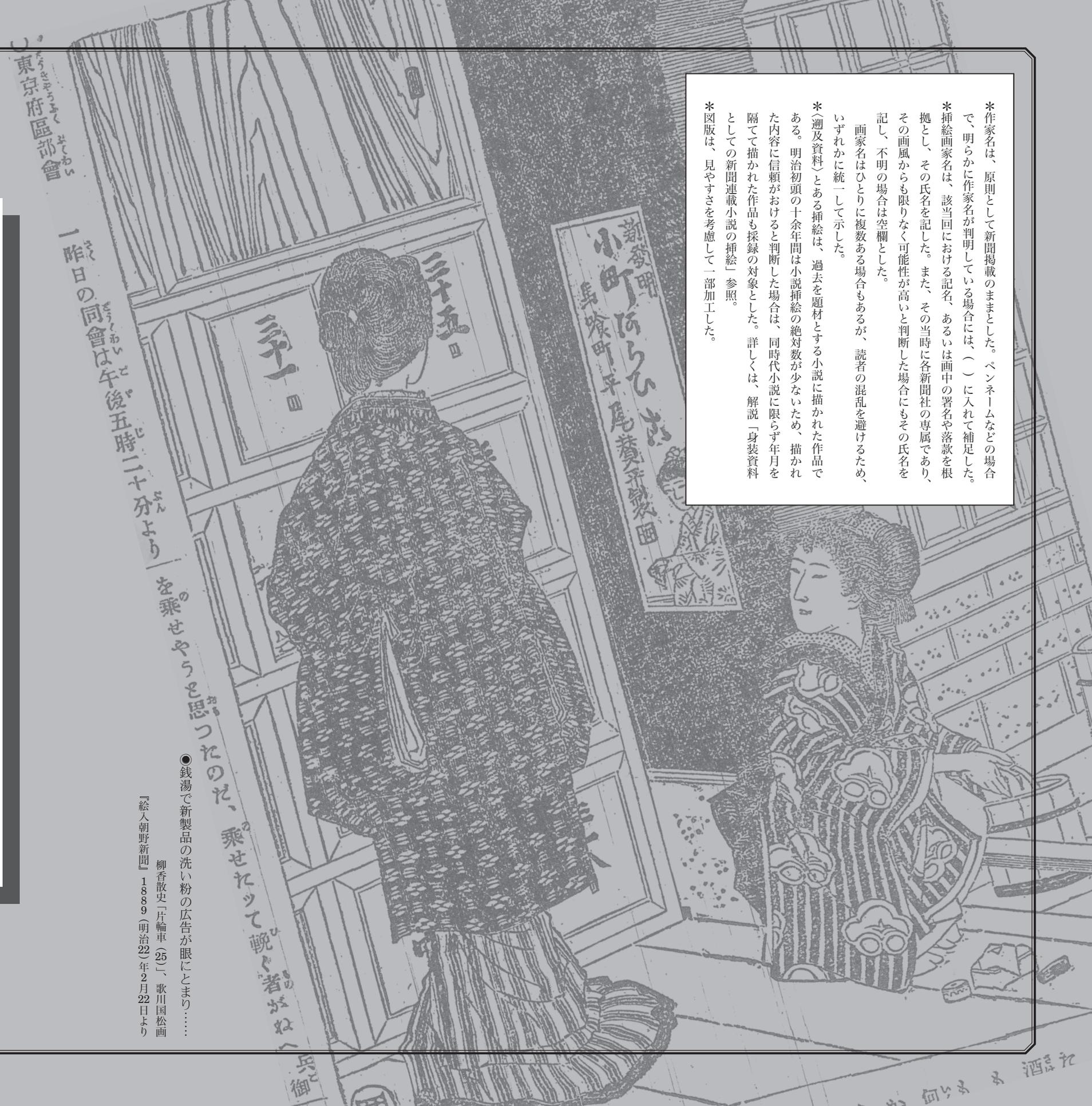
ただし、近代の日本人の暮らしのさまを知るという目的にとつては、単に連載小説に絵が添えられたというばかりではなく、小説がある程度以上の長さを持ち、それによつて作家の想いえがく人物像がよりたしかに、具体的に必要である。また、遠く隔たつた過去の事件、いわゆる時代物は除外しなければならない。このような観点から、身装資料としての挿絵つき連載小説の初出を表1に示した。この表からもわかるように、多くの読者をもつこれらの新聞に、挿絵入り連載小説の掲載が主流となるのは、一八八〇年代（ほぼ明治一〇年代）末以後のことである。

二、新聞小説挿絵はどのように使われていたか

初期の新聞は創刊の時点では木版がほとんどだったが、一八八〇年代（ほぼ明治一〇年代）までにはほぼ活版印刷となつている。しかし挿絵についてはその後も木版刷りがつづき、紙面の活版の部分にはめ込まれた。新聞に網目版印刷の写真が導入されたのは、日露戦争当時の一九〇〇年代半ば（ほぼ明治三〇年代後半）、全体として木版印刷の時代が終わるのは一九一〇年代（ほぼ大正

前半期）以後である。一九〇〇年代から一九一〇年代にかけては、印刷技術の進歩と呼応するように新聞挿絵には大きな変化があった。進歩といういい方もできよう。しかしその一方で、身装資料としての役目は失いはじめていく。そのもつとも大きな理由は、各種の情報、とくに写真情報が洪水のように増えたことであり、また一方で小説作家と挿絵画家たちが、彼等の意図する

*作家名は、原則として新聞掲載のままとした。ペンネームなどの場合で、明らかに作家名が判明している場合には、()に入れて補足した。
*挿絵画家名は、該当回における記名、あるいは画中の署名や落款を根拠とし、その氏名を記した。また、その当時に各新聞社の専属であり、その画風からも限りなく可能性が高いと判断した場合にもその氏名を記し、不明の場合は空欄とした。
画家名はひとりに複数ある場合もあるが、読者の混乱を避けるため、いづれかに統一して示した。
*(週及資料)とある挿絵は、過去を題材とする小説に描かれた作品である。明治初頭の十余年間は小説挿絵の絶対数が少ないため、描かれた内容に信頼がおけると判断した場合は、同時代小説に限らず年月を隔てて描かれた作品も採録の対象とした。詳しくは、解説「身装資料としての新聞連載小説の挿絵」参照。
*図版は、見やすさを考慮して一部加工した。



主題別にみる 日本人のすがたと暮らし

●銭湯で新製品の洗い粉の広告が眼にとまり……
柳香散史「片輪車(26)」、歌川国松画
『絵入朝野新聞』1889(明治22)年2月22日より

寝間着

ひ

ろく民俗的な視野からみれば、人が夜、床に入って寝るときに硬めの衣服を脱いで、日中外に着ている硬めの衣服を脱いで、下着の恰好になるのがふつう。べつに寝間着という服種をもたないところも多い。とくに寒冷地では裸か、裸に近い恰好で暖かい夜具にもぐりこむ習慣の土地が、外国にもわが国にもある。土地の習慣などではなく、^{ふんどし}褌一つで夜具にもぐりこむのが好きな男性はよくある。酔って火照ったからで、柔らかい冷たい布団に入る気持ちのよさはまた格別と

いう。

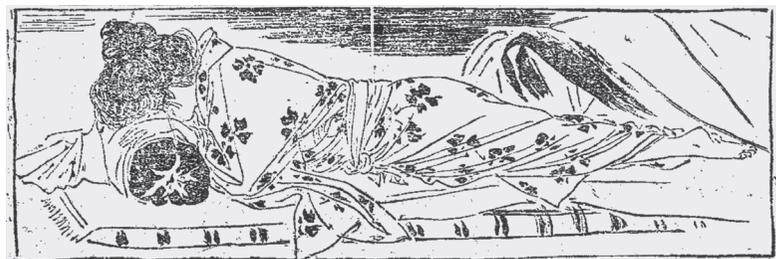
まえの時代から寝間着として男女ともに普通に用いられてきたのは、^{なまこ}袂のない木綿の単衣もので、それに細帯をしめる。

【イ】では長い袂のあるものを着ているが、洗いざらした浴衣を寝間着にする場合が多かったから、袂もあるし、けっこう派手な柄物を身に着けて布団に入ることもあったろう。日中に着たものを脱いで下着になる、という意味では、女性だったら腰きりの襦袢に腰巻、男性だったらアンダーシャツとパンツ、あるいは

は褌という恰好でもいいわけで、この場合はとくに寝間着といえるものは必要としないのだが、布団の中とはいえ夜間は冷え込む日本家屋では、そのうえに古浴衣の一枚でもなければ頼りないだろう。

寝間着は、夜がじぶんひとりの休息の時間であるか、傍らにパートナーがいる年齢、また場合か、によつていくぶんがちがう。そしてしばしばそのふたつの場合のあいだに、小さな矛盾が生じる。

昭和の初めに、女性の寝間着についてこんな言い分がある。「かなり大家の奥様だつて、伊太利ネルの腰巻きに洗い晒しの浴衣に相場が決まつていやがるからね」(寺尾幸夫『きもの』『女性』プラトン社、1927年)。
一九二〇年代後半以後に女性に愛用されたネルの都腰巻くらい、繊細な男性の、ある種の意欲を減退させたものはなかった、といわれる。さきに引用した文章にはさらにこうした一句がつづく。「男と生まれた甲斐にや偶には緋縮緬の長襦袢が見たく



【イ】

小栗風葉「青春：夏之巻 (15) (1)」
『読売新聞』1905 (明治38) 年12月16日



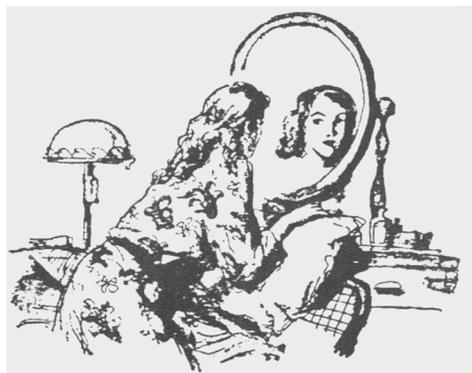
【ロ】

上司小剣「月のゆくへ (57) : 木瓜の花 (7)」、
清水三重三画
『読売新聞』1925 (大正14) 年2月15日



【ハ】

春海宏「都会の子たち (13) : 恋愛獵人 (6)」、
井川洗屋画
『都新聞』1931 (昭和6) 年2月13日



【ニ】

岸田国土「泉 (25) : 斎木元楠寡婦、住江の職業 (3)」、
松野一夫画
『東京朝日新聞』1939 (昭和14) 年11月1日

するが、とりわけ若い女性の長襦袢はむやみに赤つぽいければいいものも多く、そのすがたで布団に入るのは一般家庭だったらいくぶん異常だろう。母親などがすこし赤みのつよい寝間着を着ると、お女郎さんのようだねと、川の字の真ん中に寝る小さい子どもの前で笑ったりした。

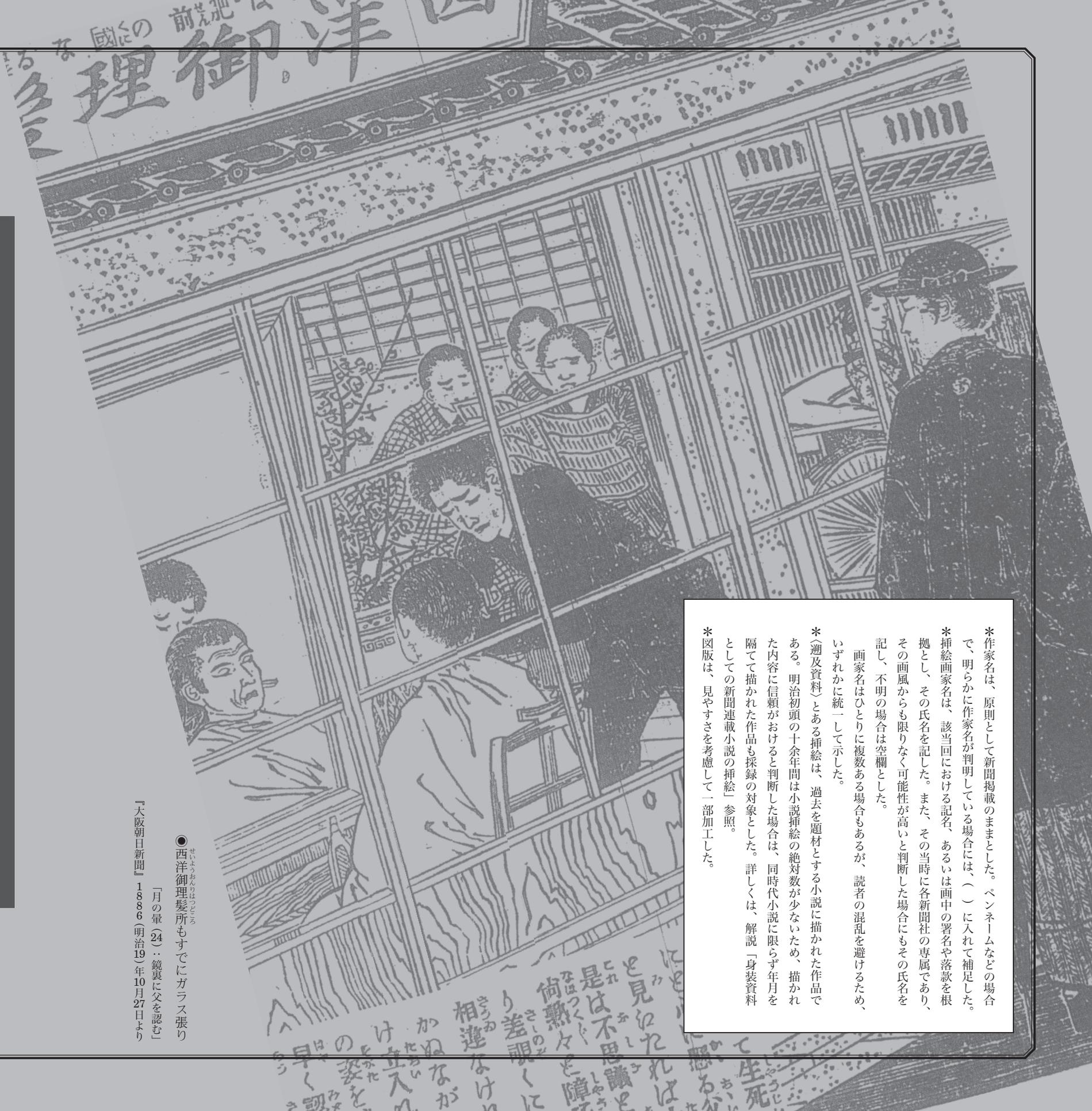
【ハ】は夜の遅い時間に男性をじぶんの部屋に招き入れた女性で、職業婦人であり、断髪の、いわゆるモダンガールだ。この女性の着ている寝間着は、井川洗屋のあまりリアルとはいえない描写からも、例のラシャメン風キモノであるらしいことがわかる。このキモノは和服の仕立てに多い縫込み類を一切省いて、襟も薄い別ぎれをかぶせただけ、帯ではなく紐付きで、着てごくらくな構造になっている。横浜の、外国船員相手のチャブ屋の女のあいだからはじまったともいわれる。

ホテルの寝間着によく見かけるが、病院の入院患者むけ貸しガウンもこの種のものだ。既製品として似たものがデパートでも売られていたはずだが、古浴衣がいくらでもある日本の家庭では、子供用以外にはあまりひろがらなかった。

一九三〇年代(昭和五年)に入ると、既婚女性以外の寝間着は、だんだんとパジャマのような洋風の時代に入る(【ニ】)。



*作家名は、原則として新聞掲載のままとした。ペンネームなどの場合で、明らかに作家名が判明している場合には、() に入れて補足した。
*挿絵画家名は、該当回における記名、あるいは画中の署名や落款を根拠とし、その氏名を記した。また、その当時に各新聞社の専属であり、その画風からも限りなく可能性が高いと判断した場合にもその氏名を記し、不明の場合は空欄とした。
画家名はひとりに複数ある場合もあるが、読者の混乱を避けるため、いずれかに統一して示した。
*遡及資料」とある挿絵は、過去を題材とする小説に描かれた作品である。明治初頭の十余年間は小説挿絵の絶対数が少ないため、描かれた内容に信頼がおけると判断した場合は、同時代小説に限らず年月を隔てて描かれた作品も採録の対象とした。詳しくは、解説「身装資料としての新聞連載小説の挿絵」参照。
*図版は、見やすさを考慮して一部加工した。



年代順にみる 日本人のすがたと暮らし

●西洋御理髪所もすでにガラス張り
「月の暈(24)…鏡裏に父を認む」
『大阪朝日新聞』1886(明治19)年10月27日より



吉原



【いまだに古風な武士姿】



【きびしいお稽古】



【理髪店】

吉

〈週及資料〉吉原の遊女の部屋。この日の冒頭に、一八七二年（明治五年）一〇月の〈娼妓解放令〉以前は旧幕時代の風を残していた、との説明があるので、花魁おいらんの身なり、本部屋の様子も努めて古い時代のままに描いたものと考えられる。花魁の髪

渡辺黙禪「実譚後のお梅（22）」
『都新聞』1903（明治36）年3月17日

い

ろから、膝を離さないように立ち居することを仕込まれた。

渡辺黙禪「実譚後のお梅（8）」、松本洗耳画
『都新聞』1903（明治36）年2月18日

き

〈週及資料〉養母に伴われて上海に渡った、武家の生まれの九歳の娘おきん。この娘を食い物にしようという養い親からきびしく遊芸を仕込まれる。いまは皿回しの皿を落として三味線のぼちで叩かれているところ。背景を描いていない挿絵のなかで、教え手の女が椅子に腰かけているのが異国を匂わせている。娘の髪は稚児輪。七、八歳からローティーンの少女がよく結っている髪。幼いおきんがここでもかなり内股であるのは、身を守るためのしぐさのひとつだろうが、女の子は物心がつくこ

高谷為之「探偵実話 剃刀おきん（44）」
『都新聞』1900（明治33）年10月9日

理

〈週及資料〉この日の本文は挿絵と関係ない。挿絵は髪結床の店内。崩れかかった髻の男も待つているように、まだこの時代では散髪と結髪の両方の客を相手にしていたはず。「髪結新三」でもわかるように江戸時代、男も女も出髪結いに頼るひとが多かった。それが缺で髪を切る時代になると、男の理髪店は店を構える居職だけになる。切った細かい毛が辺りに散るし、洗髪が必要が生じたためもある。この絵では職人は上つ張りもせず、視野のなかには洗髪の設定もない。近代理髪業への転換期のはじまりというべきだろう。仕事をしている職人が、腰に煙草入れを下げているのも彼らの気っ風のあらわれか。

渡辺黙禪「実譚 江戸さくら（51）」、松本洗耳画
『都新聞』1900（明治33）年5月10日